

パネルディスカッションPD1-4 スポーツ傷害診療に特化した当院における高 気圧酸素治療の現状

梅木秀一^{1),2)} 山口信彦^{1),3)} 平畑佑輔^{1),2)}
 笹原 潤^{1),2)} 安井洋一^{1),2)} 宮本 亘^{1),2)}
 中川 匠^{1),2)} 河野博隆²⁾

1) 帝京大学スポーツ医科学クリニック
 2) 帝京大学スポーツ医科学センター
 3) 医療法人徳洲会山内病院

2018年8月、帝京大学スポーツ医科学センター棟内に高気圧酸素治療装置を保有する帝京大学スポーツ医科学クリニックを開院した。当院の装置はバロテックハニウダ社製で、最大定員8名の第2種装置である。当施設はスポーツ傷害診療に特化しており、各種スポーツ傷害に対して高気圧酸素治療を行っている。

2018年9月から2022年6月までの総治療回数は2647回で、最も多い月は2021年12月の176回であった。なお、平均年齢は23歳であった。疾患別にみると、2021年度は捻挫・靭帯損傷336回(35%)と最も治療回数が多く、そのほか肉ばなれが214回(22%)、疲労回復131回(14%)、打撲・筋挫傷・血腫82回(9%)の順に治療回数が多かった。また、スポーツ別の治療回数は、ラグビーが1727回(65%)と最も多く、次いで陸上308回(12%)、サッカー241回(9%)の順であった。

2020年3月、世界保健機関が表明した新型コロナウイルス感染症(COVID-19)によるパンデミックは、終息しないまま現在に至っている。当施設でも感染対策の強化を余儀なくされた。当然のことながら、飛沫感染(エアゾル感染)対策はマスク着用の徹底および十分な換気量を行い、接触感染対策はエタノール消毒の徹底を行った。なお、タンク内のエタノール消毒後は30分の換気を行っている。また、1回の治療における人数制限・人数調整を行った。上限チーム数を2チームまでとし、チームと患者の同意の下、主室および副室の二部屋にセパレートし、治療を実施している。

一方、COVID-19の流行によるメリットもあった。テレワークが本学でも推奨され、公式にMicrosoft社のMS Teamsのアプリを使用することが決定した。こ

のアプリを活用することで、WEBカメラによる問診・診察が行えるようになり、医師のマンパワー不足の解消に繋がった。そのため、患者の治療のニーズ応えやすくなり、利用患者の増加に貢献した。

今後の課題としては2点挙げられる。一つは、患者の増加を目指すことで感染のリスクを上げてしまうのではないかとということ、もう一つは、感染対策の緩和が全国的に始まった場合、当院での対応をどのようにするのかということである。積極的に治療を行い、高気圧酸素治療の普及を目指したいからといって、安全性を蔑ろにするわけにはいかない。しかしながら、安全性を重視し過ぎて萎縮・衰退していくことは避けなければならない。そのバランスをどのように捉えていくか、検討・考察を重ねつつ、日本のスポーツおよび日本の高気圧酸素治療の発展に貢献できるよう努めていきたい。